

日 点 委 広 報

日 本 の 点 字

第 2 号

目 次	御 挨 拶	会長 肥 後 基 一	1
	経 過 報 告		2
	研 究 資 料		4

1973年10月15日

日 本 点 字 委 員 会

東京都新宿区諏訪町212
日本点字図書館内日点委事務局
電話 東京 (03) 209-0241

御 挨 拶

日点委会長 肥 後 基 一

昨年の日点委 第5回委員総会において、私はふたたび会長の重責を担うことになりました。他に適任者があるとは思いますが、私も半世紀にわたって点字出版に関係し、日本の点字の改善に努めてきた1人でありますので、もう1期だけ勤めさせて戴くことにいたしました。

御承知のように、日点委第1期委員の手によって、「日本点字表記法（現代語編）」が編集され、広くお使い戴いております。しかし、これは従来の慣習を基礎にして、若干の相違点の統一に努めたものでありまして、理論的根拠に乏しいという批判も頂戴しております。日本語の特質を生かし、真に理論的根拠に基づいて、点字表記の体系化をはかるうとすることは、今後に残された大きな課題であります。

私も及ばずながら努力するつもりでおりますが、全国の点字関係者各位より、

いっそうの御指導・御意見また御批判を賜わらんことを切に願ひする次第であります。(1973年10月2日)

経 過 報 告

1966年に発足した日本点字委員会は、1971年までに、「日本点字表記法」を編纂刊行して、委員は6年の任期を満了した。昨年は委員改選の年にあたり、5月開催の日盲社協東京大会において、盲人社会福祉会から、石森優、下沢仁、長谷川功、肥後基一、宮田信直の5名が選ばれ、つづいて7月開催の全日盲研静岡大会において、盲教育会から、阿佐博、折本盛美、越沢洋、小林一弘、永井昌彦の5名が選ばれた。そこで、10月14、15の両日、日本点字図書館で、第5回委員総会を開催し、はじめて両界代表委員会を開いて学識経験者の委員として、本間一夫、鈴木栄助、木塚泰弘3名を選出した後、引き続き総会と研究会を開いた。

第5回委員総会の中心議題は、本委員会の第2期の最初の総会として、役員を選出、および今後6年間の任期中に行なうべき事業の方針を決定することであった。

- (1) 役員を選出では、会長に肥後基一、副会長に本間一夫、鈴木栄助、事務局長に下沢仁を選んだ。なお事務局担当委員には、小林一弘、丹羽清雄の2名が当ることになり、その後さらに塩谷治が加わって事務局を強化した。
- (2) 事業方針としては、すでに刊行された「日本点字表記法」が多くの問題点を残しているので、さらに検討を加え、1977年までに、全面的な改定をはかること、但し2通りないし3通りの表記を認めている小数点および長音については1つに統一するという線で検討を重ね結論が得られ次第、部分的な改定を行なうことを確認した。
- (3) 専門委員会として、すでにおかれている数学記号・理化学記号専門委員会に加えて、相互変換用点字専門委員会を設けることとし、阿佐博、尾関育三、川上泰一、木塚泰弘、小林一弘、塩谷靖子、田中徹二、長谷川貞夫、宮田信直の9名に委員を委嘱した。

第6回委員総会は、1973年7月27、8の両日、日点および日盲福祉センターで開催され、次の議題を検討審議した。

- (1) 小数点の統一および点字数学記号の確定と解説書の発行
- (2) 中点と行末のつなぎの検討
- (3) 小文字の検討
- (4) 外来音の検討
- (5) かぎ、下線、傍点などの検討
- (6) 長音の表記の検討
- (7) 「ようだ」のわかち書きの検討
- (8) 句点のあとのますあけの検討

このうち(1)および(2)は下記の通り決定し、その他は更に検討を重ねることになった。

決定事項

- (1) 小数点……従来、小数点は、数学など専門書では三の点、その他の一般書では四・六の点で使用されていたが、これを二の点に統一し、これに伴って、3桁または4桁毎の桁くぎり点、および乗法のドットの記号を三の点にする。

理由……2種類の小数点を、専門書とか一般書とかいう基準で、使いわけるとは、實際上わずらわしいことであり、不便でもある。数学記号の中でも、小数点は、一般的に使用度の高い記号であるから、共通の一つの記号であることが望ましい。そこで、従来行なわれていた二つのうちの一つをとるといふことがまづ考えられるが、それは双方にそれぞれ理由があって、二者択一的な解決は困難であった。すなわち、四・六の点をとれば、数学記号の体系の中で、四・五・六の点を外国文字の前記号に専用するという原則をくずすことになる。他方三の点は助詞の「わ」と同形であるうえ、数字に「割(ワリ)」「和音(ワオン)」などの語が続く場合、その間につなぎをはさむことになり、それは数字につづくア行・ラ行が文字であるのに対し「割(ワリ)」や「和音(ワオン)」は語であって、表記

法の上では例外的な扱いとなり表記を複雑にするので好ましくない。そこで本委員会では、数学専門委員の意見も聞いたうえで、二の点に統一することに決定した。なおこれは積極的な理由ではないが小数点の二の点および桁くぎり点の三の点は、英仏の数学記号に一致する。

- (2) なか点を五の点にし、それに伴って、行末のつなぎを六の点にする。

理由……従来用いられていたなか点の六の点は、助詞の「わ」と誤読されやすいうえ、なか点の性質上、行の中央の方が感覚的に好ましいので、五の点を取り、これに伴って、行末のつなぎを六の点に変えた。

この改定は、1974年（昭和49年）4月から、教科書その他で実施される。

研 究 資 料

日本点字委員会では、第2回委員総会で、点字表記法の統一をほぼ完成した。その後、残された不統一点の解消と体系化に努め、第6回委員総会で、小数点の統一および中点と行末のつなぎの修正を行なった。現在5項目ほどの問題について統一と体系化に努めている。ここに紹介するのは、現在検討中の問題についての研究資料としてまとめたものである。各地でご検討の上ご意見を文書でいただければ幸いである。

1. かぎ、下線、傍点など

〔問題点〕 従来の「かぎ」は開き閉じの区別がなく、「つなぎ」と同形なので誤読のおそれがある。殊に数行にわたる場合、どれが「つなぎ」であるか、「閉じかぎ」であるかに迷うことがある。さらに、「閉じかぎ」のあとに助詞の「ワ」がくる場合などは読みにくい。また、最近、受験問題などでは下線（アンダーライン）、傍線（サイドライン）、下点（強調のために語句の下にうつ点）、2行の下線や傍点など、および「てんかぎ」（点で「かぎ」の開き閉じを示す）などを「かぎ」と区別して使う必要も生じた。これらの問題を体系化の中で整理して解決する必要がある。

〔解決案〕 「かぎ」については、従来の慣習を尊重しながら二ます記号で整理する。すなわち、⋮□⋮ を主体としてその外側を一重の場合は五の点と二の点でかこみ、二重の場合は五・六の点と二・三の点でかこむと、二重かぎは従来のままとなり、「かぎ」も従来のものと近くなる。

かぎ ⋮ ⋮ □ □ ⋮ ⋮ ⋮ 二重かぎ ⋮ ⋮ □ □ ⋮ ⋮ ⋮

下線または傍線、下点または傍点、二重下線・二重傍線・二重下点・二重傍点、または「てんかぎ」などは、次の符号の中から適当なものを検討することとする。

⋮ ⋮ □ □ ⋮ ⋮ ⋮ ⋮ □ □ ⋮ ⋮ ⋮

⋮ ⋮ □ □ ⋮ ⋮ ⋮ ⋮ □ □ ⋮ ⋮ ⋮

〔例〕 ⋮ ⋮ 5 ⋮ ⋮ エンダマヨ ⋮ ⋮ □ □ コレワ ⋮ ⋮ ⋮ ヲ □ カレワ □

クリカエシ □ イッテ □ イタ。

⋮ ⋮ ⋮ ⋮ アッチエ □ イケ ⋮ ⋮ ⋮ ⋮ □

ゴアイサツダネ ⋮ ⋮ ⋮ ト □ カレワ □ イッタ。

〔備考〕 かぎ・線・点、などを内側で示し、一重か二重かを外側で示せば体系的に整理できて問題点は解消される。しかし、頻度の多い「かぎ」が二ます記号になるのでスペースをとるといふ意見もある。

2. 長音の表記

〔問題点〕 長音の表記の相異については戦前からの長い歴史がある。いろいろな時代のいろいろな主張にそって学び使用している人々が自分が慣れた表記を主張している。さらに、現代かなづかいが制定されてから早くも四分の一世紀を経過して一般に定着してきたことと関連して、現代かなづかいと点字のかなづかいを対応させるという主張が強くなってきた。すでにカナ文字タイプストのほとんどが現代かなづかい方式を使用している時、点字のかなづかいだけが独自性を主張する意味がどこにあるのかという意見もある。さらに、現代かなづかいとの相異点は、長音と助詞の「は、へ」だけだから、これを対応させれば普通の文字への変換や、一般の人との交流や子どもの教育にも有利であるとも主張されている。一方それに対し、長年使いなれた長音棒引きの表記を存続させたいという意見も

相当根強いものがある。ここに諸説を列記して比較検討の資料としたい。

(1) 現代かなづかいの長音の表記と同じ方式

オカアサント□オネエサンガ□リョウリヲ□マナボウト□シテ□
トオク□ニイガタカラ□オオサカマデ□ヤッテ□コヨウト□シタ。

(2) 長音に発音する「ウ」は、長音符を用い、その他はかなを用いて書く方式

オカアサント□オネエサンガ□リョーリヲ□マナポート□シテ□
トオク□ニイガタカラ□オオサカマデ□ヤッテ□コヨート□シタ。

(3) 日本点字表記法の本則どおりで許容をなくす方式

オカアサント□オネエサンガ□リョーリヲ□マナポート□シテ□
トオク□ニイガタカラ□オーサカマデ□ヤッテ□コヨート□シタ。

(4) エ列の漢語や動詞の語尾およびイ列の長音を除いて長音符を用いる方式

オカーサント□オネーサンガ□リョーリヲ□マナポート□シテ□
トオク□ニイガタカラ□オーサカマデ□ヤッテ□コヨート□シタ。

(5) 外来語と同じく長音にはすべて長音符を用いる方式

オカーサント□オネーサンガ□リョーリヲ□マナポート□シテ□
トオク□ニーガタカラ□オーサカマデ□ヤッテ□コヨート□シタ。

3. 小文字符と外来音の表記

〔問題点〕 カナ文字タイプのテキストなどに用いるため小文字符を定めた。しかし、四・六の点では次の文字との結びつきで読みにくいという意見がある。すなわち、小文字符の四・六の点は小文字の「あ、い、う、え、お、や、ゆ、よ、つ」に前置すると、その文字の一・三の点とのなじみがわるく、前の文字との間が離れすぎて単語が切れる感じがするから、二・六の点がよいというのである。ところが二・六の点では外来音の前置符号と混同されるので、外来音がこのままでは使用できない。一方、外来音は不規則で覚えにくく単純化してほしいという意見がある。たしかに前置点が8種類もあり、外文字符や大文字符との混同もみられる現在の外来音には問題がある。

〔 解決案 〕 外来音は小文字符を用いて一般のかなづかいのとおりに表示方法がある。これなら覚えやすいし、一般の表記との切りかえもらくである。小文字符のために外来音を変えるのであれば本末転倒であるが、外来音を覚えやすくするために小文字符を用いるのであれば問題はない。その場合、小文字符として四・六の点でも、二・六の点でもさしつかえはない。そこで、現在の表記と四・六の点の小文字符を用いたもの、さらに小文字符を二・六の点とした場合の順に外来音の表記の方法を比較してみる。

〔 例 〕 ウィ (♂ ♀)ーん ウ ♂ ♀ ィーん ウ ♂ ♀ ィーん
 ウェ (♂ ♀)リントん ウ ♂ ♀ エリントん ウ ♂ ♀ エリントん
 ミルウォ (♂ ♀)ーキー ミルウ ♂ ♀ オーキー ミルウ ♂ ♀ オーキー
 クァ (♂ ♀)ンチ ク ♂ ♀ アンチ ク ♂ ♀ アンチ
 グァ (♂ ♀)ム グ ♂ ♀ アム グ ♂ ♀ アム
 シェ (♂ ♀)ード シ ♂ ♀ エード シ ♂ ♀ エード
 ページェ (♂ ♀)ント ペーヅ ♂ ♀ エント ペーヅ ♂ ♀ エント
 チェ (♂ ♀)ーん チ ♂ ♀ エーん チ ♂ ♀ エーん
 ツァ (♂ ♀)ーリ ツ ♂ ♀ アーリ ツ ♂ ♀ アーリ
 ライブツイ (♂ ♀)ヒ ライブツ ♂ ♀ イヒ ライブツ ♂ ♀ イヒ
 フィ (♂ ♀)レンツェ (♂ ♀) フ ♂ ♀ イレンツ ♂ ♀ エ フ ♂ ♀ イレンツ ♂ ♀ エ
 ジムツォ (♂ ♀)ーヴァ (♂ ♀) ジムツ ♂ ♀ オーヴ ♂ ♀ ア ジムツ ♂ ♀ オーヴ ♂ ♀ ア
 プロスティ (♂ ♀)テュ (♂ ♀)ーション プロステ ♂ ♀ イテ ♂ ♀ ユーション
 プロステ ♂ ♀ イテ ♂ ♀ ユーション
 ビルディ (♂ ♀)ング ビルデ ♂ ♀ イング ビルデ ♂ ♀ イング
 プロデュ (♂ ♀)ーサー プロデ ♂ ♀ ユーサー プロデ ♂ ♀ ユーサー
 トゥ (♂ ♀)ルース ト ♂ ♀ ウルース ト ♂ ♀ ウルース
 ヌードゥ (♂ ♀)ル ヌード ♂ ♀ ウル ヌード ♂ ♀ ウル
 ファ (♂ ♀)ン フ ♂ ♀ アン フ ♂ ♀ アン
 フィ (♂ ♀)ンガー フ ♂ ♀ インガー フ ♂ ♀ インガー
 フェ (♂ ♀)ンス フ ♂ ♀ エンス フ ♂ ♀ エンス
 テレフォ (♂ ♀)ン テレフ ♂ ♀ オン テレフ ♂ ♀ オン

ヴァ (ッ ッ)ーバリズム ヴ ッアーバリズム ヴ ッアーバリズム
 ヴィ (ッ ッ)オラ ヴ ッイオラ ヴ ッイオラ
 アクティ (ッ ッ) ヴ (ッ ッ) アクテ ッ イブ アクテ ッ イブ
 ヴェ (ッ ッ)ール ヴ ッエール ヴ ッエール
 ヴォ (ッ ッ)イス ヴ ッオイス ヴ ッオイス

〔備考〕 小文字符を用いて外来音を表記した場合、初心者には覚えやすくなるが、単語のます数がふえてひきしまった感じがうすれる。しかし、外来音の頻度は少なく行数にはあまり影響しないから文字を思い出す苦勞が少ない方がよいという意見もある。

4. 「ようだ」の接続について

〔問題点〕 「ようだ」と前の語との接続関係について従来3種類の表記法が行なわれていた。第2回委員総会では助動詞であっても形式名詞的役割が強いことと初歩者の読みやすさを考慮して助動詞の例外として離して表記することとした。しかしながら学校文法では助動詞として定着しており文節分かち書きの立場から例外を設ける必要はないという意見が根強くある。これについては、分かち書きの原則の確定と関連して体系的に取り扱う必要がある。

5. 分かち書きの原則

〔問題点〕 現在の点字の分かち書きは小学校低学年の教科書の分かち書きとカナモジ協会の分かち書きの中間に位置している。文節分かち書きを第一の原則としている以上文節の概念規定を明確にすることが体系化の立場から要求されている。その場合、漢語の複合語や同じ音節で文法的な役割の異なるものなどの判定のめやすを何にするかが問題となる。文字アクセント、意味などについて検討し例外も少なくみわけやすい方法を体系化の中で見いだす必要がある。